

おじいさんの出^で場^ば

国分一太郎著 北島新平絵



贈
寄
小沢正雄氏

おじいさんの出場で

国分一太郎著
北島新平絵

あすなろ書房



おじいさんの出場

あすなろ創作シリーズ 10



著 者 紹 介

著者 こくぶんいちたろう
国分一太郎

1911年、山形県北村山郡東根町（現在東根市）に生まれる。1930年、山形県師範学校をでて小学校の教師となり、八年間つとめる。そのあいだ生活綴方の運動にくわわる。1938年、教師をやめさせられてあと、教育や児童文学関係の文筆のしごとにはげんでいる。文学関係の著書は『国分一太郎児童文学集』（全六巻）『若い自画像』（全3巻）など。

画家 きたじましんぺい
北島新平

1926年、福島県に生まれる。1944年、長野県に移り教師生活を続け、後に退職して上京。現在、信州児童文学会々員。児童図書のさしえで活躍。

この本をつくった人

企 画 山浦常克
編 集 伊東和雄・高木典子
本文印刷 第一印刷株式会社
表紙印刷 双美印刷株式会社
// 進行 平本和宏
製 本 (有)端野製本

NDC 913

国分一太郎

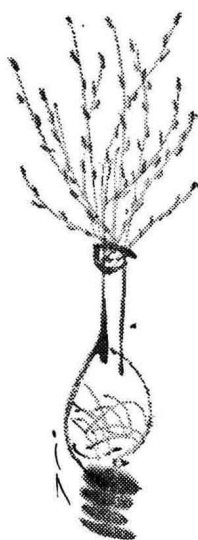
でいば
おじいさんの出場

あすなろ書房 1972

216P 22cm（あすなろ創作シリーズ10）

も
く
じ



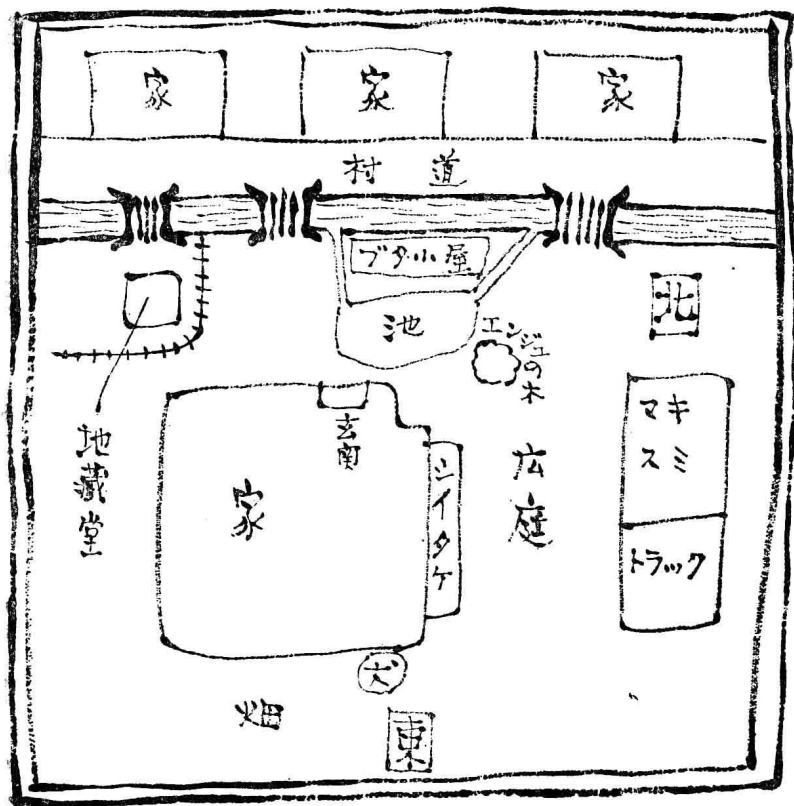


1	山ずき一家……………	6
2	地図のゆくえ……………	16
3	その夜の客……………	26
4	なぜ、地図が大事か……………	37
5	「おじいさんから聞いた ことの日記」を見ながら……………	47
6	山のやさしさ……………	65
7	「見本老人」……………	88

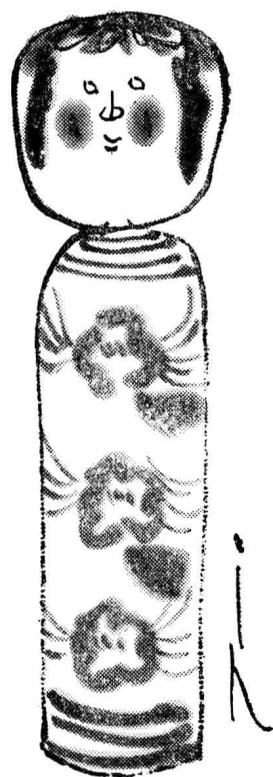
8	天のくだされもの……………	108
9	「先生」の手紙……………	130
10	「つるたごみ」の話……………	144
11	「ひみつ」と「ひみつ」……………	158
12	このもうひとりの ひとまでが……………	181
13	おわりに……………	204

そうてい・さしえ 北島新平





おじいさんの出^で場^ば



1 山ずき一家



地藏堂^{ぞう}わきのちいさな板橋をわたって、郵便配達^{ゆうびん}の自転車^{じてん}が、やしきの中へはいってきた。すると、小川を背^せにしてたてられた東向きのブタ小屋の中で、ブタの親と子どもたちが、いっせいにさわぎはじめた。いっぽう、おも屋のうらのほうでは、かんだかいイヌのほえ声がはじまった。つづいて、そのほえ声は、こちらにむかってうごき、しっぽをくりりとまいた小がらのアカイヌが、まじめくさい顔つきで、モモ色のコスモスのむこうから、かけよってきた。けれども、五十二、三歳^{さん}ほどの背の高い配達夫が、エンジの木の下へ自転車のスタンドを、ギッと音させて立てると、

「なんだ。いつもお茶をのんでいく目のほそいおじさんか。」

とでもいうように、ほえるのをやめ、ひらひらとしっぽをふった。ブタ小屋の連中も、やがて、なくのをやめた。

「よし、よし、アカ。きょうもるすばんか。」

あさぐろい顔に白い歯を見せてあやし、老配達夫は、カバンの中から、一通の封書ふうしゅを取り出して、戸口のところへ行つた。

「おるすですか、おばあさん。郵便ゆうびんです。」

手をかけたが、戸はあかなかった。

「やっぱり、山ですか。」

古びた柱と戸とのすきまから、郵便物をさし入れてやって、配達夫は戸口のところをはなれた。それから、思い出したように、さっきイヌがそこをまわってきた、家の北がわのほうへ歩き、わら屋根ののき下に立ってかけてあるシイタケのほだ木ほだき（人工的に菌きんをうえてキノコが出るようにした木）のまえに身をかがめた。

十五、六本ならんだ、一・五メートルぐらいの長さのほだ木は、どれも、みごとにシイタケを、もうはえさせている。なかには、子どもの耳ぐらいな大きさになり、かば色と白色をした、みずみずしく、よくこえたすがたを、あらいクヌギの木のはだから、ほこらしげに、つき出しているのもある。

「おーお、このまじいこと！」

足を横にずらして、一本ずつ見ていくと、大きいのが、つぶぞろいに出た、九本目かのほど木に、ちいさい紙きれが、ピンでとめてあった。紙きれには、字が書かれていた。

ふなつりのおじさんへ

しいたけを、よいほど、とっていつてください。ビニールのふくろをおいておきます。

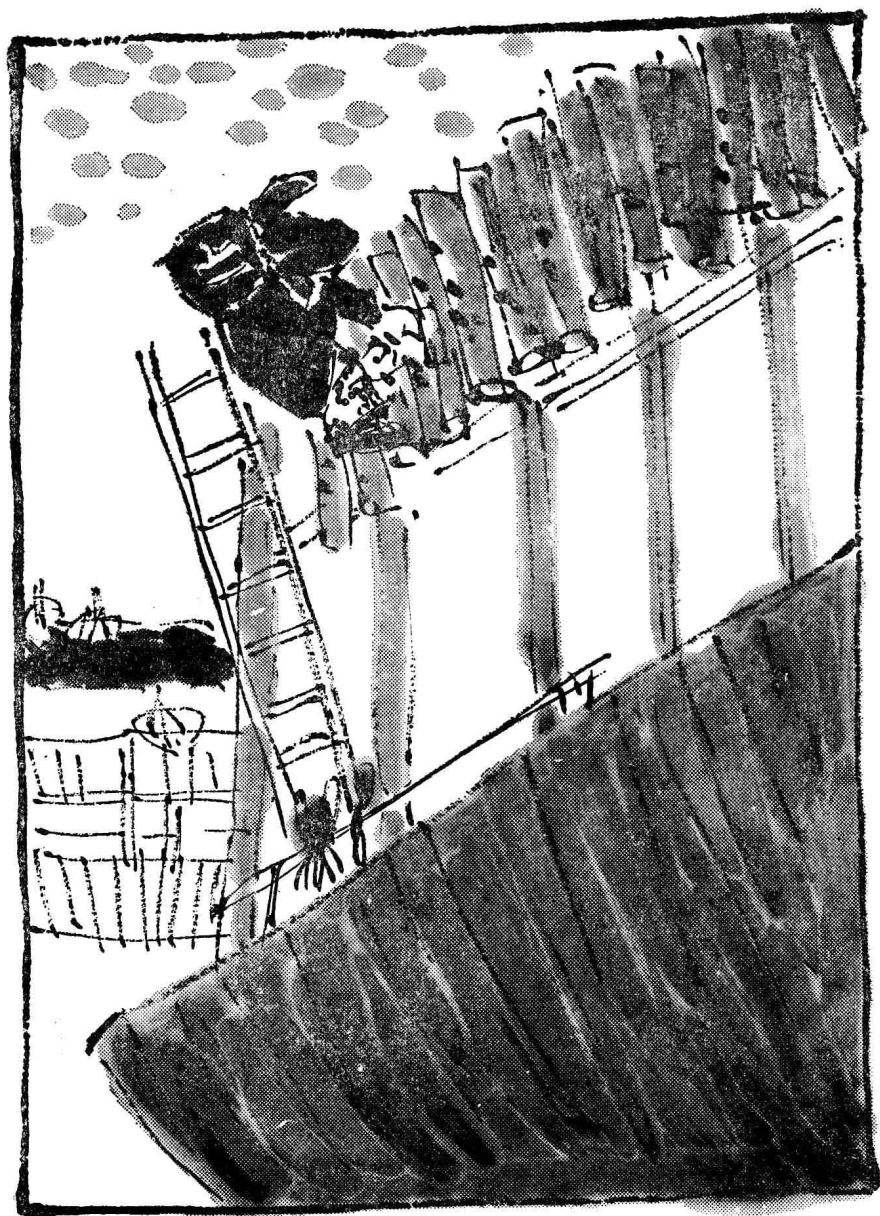
そのビニールのふくろが、やはり、ほど木[・]のねもとのところにおいてあった。

「ああ、ありがとうございます。」

しずかなあたりのなかで、配達夫は、目のまえにいる人にいうようにこういった。

くふなつりのおじさん[・]とは、この配達夫のことである。この家の三年生になる、まごむすめ、キヨ子が、こうよぶのだ。

この家から、東京へおよめにいっているおばさんのていしゅ[・]というのが、いつか、お客にきていた。さかなつりがバカみたいにすぎだといった。配達夫も、それには目がないほうなので、つい話がはずんだ。それでは二日あとの休みの日に、フナつりによいところへ案内しましょう。こういって、その日になると、むかえにきてあげた。うまいことに、その日は、大きな



フナがよくつれた。東京からの客は大満足して、

「いや、ありがとう。いや、ひさしぶりで。」

と、くりかえしいった。それから配達夫は、ここへくると、郵便のおじさんではなく、クふなつりのおじさん々になってしまった。

△おばあさんが、あの孫むすめに、書かせておいてくれたんだなあ。▽

紙きれをはずし、ビニールのふくろを手にしなげら、配達夫は、ほそい目をいっそうほそくした。

二週間ばかりまえに、配達にきたとき、タネをうえて一年ばかりたつし、そろそろ出かかるころだからと、ほだ木を山からはこんできていた。それから、十日ばかりたって、またきたら、ぼつぼつ出はじめていて、

「このつぎの日曜日あたりが、とりごろださけ、いるだけとっていがっしやい。郵便など、こなくても、道から、ひょこっと、はいってござっしやいや。」

「るすでもいいさけ。」

おばあさんとおじいさんが、ふたりで、こういったのだった。その日曜日がきょうなのである。

「では、いただいでいきます。」

配達夫は、ひとりごとをいいながら、紙きれのとめてあったほだ木を中心に、二十個ばかりの大きなシイタケを、ふくろの中にとった。ひとつとるたびに、いいにおいがあたりにひろがった。

さっきの紙きれのうらに、

えんりょなくいただいでいきます。

ありがとう。

ふなつり

と書いて、ほだ木にピンでとめたとき、家の中で、二時をうつ柱時計の音が、しずかに聞こえた。

シイタケのふくろを、カバンの中に入れ、ブタ小屋のまえの池で手をあらっていると、ブタどもが、またなきはじめた。

「ああ、よし、よし。」

配達夫は、ブタ小屋へ近づき、左がわにあるえさ置き場のところから、いかにもかつて知つたように、配合飼料^{けいはい}をザルにとり、それを親ブタと、子ブタのえさ入れ^{えさいれ}にあけてやった。ブタどもは、よろこんで食いはじめた。このまえより、ずいぶん大きくなったな。あらそつて食べている、モモ色をした十一びきの子ブタどもを見ながら、配達夫は、ひとりでニコリした。アカイヌは、いつのまにか、そばにはいなかった。

仕事場としてもつかう、だだっぴろい庭の北のはしに、別棟^{べつどう}として建てた車庫兼用^{けんよう}の小屋には、戸がなくて、右はじに、山でやいてきた木炭のたわらが高くつまれていた。割^わつてきれいにきざんだまきも、ならべてつんであった。赤と黄のケイトウが、東がわにさいた赤土まじりの庭と、炭のたわらと、うつくしく見えるまきのたばの木口^{きぐち}と、そこに、九月もなかばをこした午後の太陽が、まだすこしつよい光をなげかけている。

自転車のハンドルに、両手をかけて立って、配達夫は、このるすの家の戸口、仕事庭、物置き小屋などを、ゆっくりながめまわした。

「ほんとうに、山ずきの、みんないい人たちで。」

ひとこと、こうつぶやいて、ぼうしをとり、どこにともなくおじぎをしながら、自転車にのつた。そして、トラックのはいるべつな、ひろい板橋をわたり、道のほうへと出ていった。

配達おじさんが、いいいのこしていったことのうち、いい人たちというのはべつとして、みんな山ずきとはどういうことなのだろうか。

〳ヘラカラざらい〳でとおっている清七おじいさんは、ことし六十九歳さいの、家の外では無口なおじいさんだ。おばあさんが、しゃべってまわると「ヘラカラいうな」と、すぐおこりだす。

地蔵ぞうわきのお父ちちといわれた父親の清作につれられて、十一、二歳の子どものころから、山へ炭やきに行った。それで小学六年までの教育も、まんぞくにはうけていない。あれからいままで、北海道の旭川あさひかわに二年間、兵隊にとられていたとき以外は、ずっと山へ行きどおしのだ。

それほどよけいなおしゃべりはしないのに、「ヘラカラいうな」と清七おじいさんから、よくしかられるおばあさんの名は、オトメという。おじいさんより二つ年下だが、このおばあさんは、一年生にも学校にいていない。だから字はぜんぜん読めない。うまれたときから、やはり山仕事をする親たちに、いっしょにつれていかれて、すっかり山になれた。清七おじいさんと結婚けっこんしてからは、山の炭やき小屋でくらす日がおおかった。年をとってから、やっぱり山へでかけていく。孫たちが小さいころは、そのもりをしてうちにいたが、山へ行かないと、〳頭がやめる〳といっている。

清七おじいさんのむすこの名は清二。ことし三十五歳のはたらきざかりだ。妻のキク子とのあいだに、ふたりの子どもがある。上は男の子で五年生の清太、下が女の子で三年生のキヨ子。

清七おじいさんには、ほんとうはこの清二のうえに、ふたりの姉と、長男とおった。ふたりの姉はそれぞれ東京へよめにいつている。つぎの長男は清一といい、それがおよめをもらった翌年の昭和十九年に、戦争にひっぱられていつて、フィリピンで戦死した。年は二十二歳だった。そのとき、弟の清二はまだ八歳。清七おじいさんは、くあととりそだてのやりなおしぐといつて、戦後、この二番目のむすこを、大の山ずきにそだてあげ、炭やきのうでを、ぐんぐんみがかせた。そんなわけで、いまの清二は、このへんではだれにもまけぬほどのりっぱな炭やきとなつてゐる。

その清二には、営林署の苗圃につとめて、スギやヒノキや、カラマツなどのなえをそだてる仕事をしてゐたむすめが、隣村からよめにくた。それがキク子で、さつきいつた清太とキヨ子のおふたりをうんだ。やはり大の山ずき、それに木ずきときてゐるから、清二のところへおよめにくたようなものだろう。清太やキヨ子がちちをのむころは、家にいたけれども、あとはオトメおばあさんに、子どもをたのんで、清二といっしょに毎日山へ行つた。